

〈論 文〉

クリオーリョという観点から見た先住民記録者
アルバ・イシュトリルシヨチトル

井 上 幸 孝

要 旨

En este artículo analizaremos los documentos históricos acerca de la persona y familia de Fernando de Alva Ixtlilxóchitl (1578–1650). Se ha considerado que Alva Ixtlilxóchitl es un historiador indígena, pero el presente estudio trata de aclarar que su vida real no fue tan “indígena” sino más bien cercana a la de los criollos.

Primero, resumimos la visión que suelen tener de este cronista: mientras se ha difundido la imagen “indígena” de Alva Ixtlilxóchitl, en algunos estudios especializados se ha señalado que su discurso era típicamente colonial. Luego, tras indicar las similitudes en algunos puntos discursivos entre las obras de Alva Ixtlilxóchitl y las de Carlos de Sigüenza y Góngora, erudito criollo del siglo XVII novohispano, observaremos que Alva Ixtlilxóchitl, al escribir sus obras, se consideró a sí mismo “autor indígena”, capaz de interpretar correctamente la información nativa para narrar el pasado prehispánico.

Después, en la parte principal de este artículo, profundizaremos los documentos históricos acerca de Alva Ixtlilxóchitl y su entorno para analizar las circunstancias sociales en las que vivían el cronista y su familia. En estos documentos, se observa que Alva Ixtlilxóchitl y su familia llevaban una vida similar a la de los criollos. Encontramos, por ejemplo, que desde el siglo XVI poseían casas en la ciudad de México, que mantenían lazos con las iglesias urbanas de barrios españoles y que su hijo (Juan de Alva) tuvo contacto directo con el sabio criollo Sigüenza y Góngora. Incluso, es probable que el cronista naciera en esa misma capital novohispana.

Así, concluimos que la imagen de Alva Ixtlilxóchitl que encontramos luego de examinar dichos documentos es bastante diferente a la del cronista “indígena” que hemos tenido tradicionalmente. Antes de terminar el artículo, también desarrollaremos una breve reflexión hacia futuras investigaciones acerca de qué podemos hacer para ir aclarando más detallada y precisamente el nacimiento del criollismo en la Nueva España.

キーワード：アルバ・イシュトリルシヨチトル (Alva Ixtlilxóchitl),
シグエンサ・イ・ゴンゴラ (Sigüenza y Góngora), クリオーリョ (criollo),
先住民 (indígena), 記録者 (cronista)

はじめに

一般に、スペイン領アメリカにおけるクリオーリョは17世紀から18世紀にかけてそのアイデンティティを次第に確固たるものとし、最終的には19世紀初頭に本国スペインからの独立に向

かっていったと理解されている。『最初のアメリカ』の著者である英国の歴史研究者D・ブレイディングは、イベリア半島出身者（ペニンシュール）との差異化を図ろうとする彼らの思想を「クリオーリョ愛国主義」という言葉で表現した（Brading 1991）。

スペインからの独立において主要な役割を果たしたとされるクリオーリョが自己をペニンシュールから区別するに際し、先スペイン期の過去への言及は、彼らの主張の中で重要な部分を占めた。遺伝学的に半島出身者と何ら異なる点がない状況の下で彼らが文化的な面で差別化をするためには、地元の古代文明の存在が有用だったからである。それゆえ、彼らは自己の「祖国(patria)」を強調し、その「祖国」を讃える言説の中に、ギリシアやローマと比することのできる大文明がかつて存在したとの主張を持ち込んだ。そのような「先住民の過去の流用」があったということについては、上記ブレイディングの研究書以外にも一定の研究の蓄積がある¹⁾。

ヌエバ・エスパーニャ副王領におけるクリオーリョ思想形成の出発点の一つとしてしばしば名が挙げられるのは、17世紀後半の文人カルロス・デ・シグエンサ・イ・ゴンゴラ（Carlos de Sigüenza y Góngora、以下シグエンサと略記）である。以前、筆者はこの人物のクリオーリョとしてのアイデンティティ形成の源流を探り、16世紀のクリオーリョ著述家たちのみならず、先住民記録者として知られるフェルナンド・デ・アルバ・イシュトリルシヨチトル（Fernando de Alva Ixtlilxóchitl、以下アルバと略記）からのアイデアの借用が見られる点を指摘した（井上2005）。

本稿では、その議論を一步先に進め、シグエンサによるそうした「流用」を受けることになったアルバ本人にクリオーリョ的と呼び得る要素があったのか否かを検討する。その上で、クリオーリョ・アイデンティティの形成過程をどのように把握していくことが可能かについて今後の展望を考えてみたい。

1. 先住民記録者としてのアルバ・イシュトリルシヨチトル像

従来、アルバは、先住民記録者（cronista indígena）もしくは先住民史家（historiador indígena）と見なされてきた。例えば、19世紀末に彼の歴史書を編纂し公刊したA・チャペロは次のように述べている。

〔アルバ・〕イシュトリルシヨチトルはテスココ〔テスココ〕人という出自の記録者である。彼ほどの名声と評判を獲得している著述家はほんのわずかしかない。にもかかわらず、数多くの彼の作品は知られていない。〔…〕テスココの最後の王もしくは領主の玄孫で、メシコの最後から二番目の王クイトラクワの娘ドニャ・ベアトリス・パパンツィンと上記の王の夫婦の家系に属する。1569年頃に生まれ、トラテロルコのサンタ・クルス学院の生徒であった。晩年にはフスガド・デ・インディオスの通訳を務め、1648年に80歳で死去した〔…〕。（Alva Ixtlilxóchitl 1952[1891], I: 5-6）²⁾

20世紀中葉、M・レオン＝ポルティージャが「敗者の視点（visión de los vencidos）」を提唱し、先住民側の観点からのメキシコ征服史の見直しを唱えたことで、アルバの記録文書も幅広く読まれるようになった（レオン＝ポルティージャ 1994 [原著 1959]）。19世紀にチャペロが編纂した『ドン・フェルナンド・デ・アルバ・イシュトリルシヨチトルの歴史著作集』はちょうどこの少

し前に再版されており、さらに1975～77年にはE・オゴルマンが新たな校閲版を公刊した(Alva Ixtlilxóchitl 1952; Alva Ixtlilxóchitl 1985)。これらの出版により、アルバの各著作は研究者のみならず一般読者の目にも広く触れるようになった。

オゴルマンは、新たな校閲版を公にするに際して国立総合文書館(AGN, Archivo General de la Nación)の複数の史料を付録として収録した。また、同じ頃、文化人類学者のG・ムンチがアルバの家系に関する個別研究を行い、その成果を研究書として公刊したが、その際にもこの家系に関するいくつかの文書が収録された(Munch 1976)。これらの史料の出版により、上記の引用文が与える印象とは大きく異なるアルバの人生や家族に関わる情報の存在が明らかになった。

アルバのそうした「非インディオ的」な側面を最初に指摘したのは、他ならぬオゴルマンであった。オゴルマンは、1972年のアルバの著作のアンソロジー出版の際に、彼を「ヌエバ・エスパニーヤ人(hombre novohispano)」と形容し、先スペイン期の先住民像とも、征服者たるスペイン人像とも異なる、17世紀前半を生きた特異な人物としてのアルバ像を指摘した(Alva Ixtlilxóchitl 1972: 13)。近年では、植民地時代メキシコの歴史記述の研究においてオゴルマンの後継者に当たるJ・R・ロメロ・ガルバンが、「彼の立場はスペイン人クリオーリョ集団に近いものだったのではないかと提案したくなる」と述べている(Romero Galván 2003: 363)。しかしながら、「先住民記録者」という従来の一般的イメージはさほど大きく修正されないまま今日に至っている。

広く流布した先住民記録者のイメージは払拭されていないものの、専門的な個別研究においては、アルバが「先スペイン期的」という意味においての「先住民らしさ」を持ちあわせていないことが明らかにされてきたのも確かである。例えば、フランスの歴史研究者G・ボドは、1995年の論文でネサワルコヨトルに関するアルバの記述を検討し、彼のクロニカに書き残された内容が「ヨーロッパ古典古代の王」のイメージに沿ったものであることを明らかにした(Baudot 1995)。上述のロメロ・ガルバンの論考もこの点を指摘している。また、筆者も幾度かの機会にアルバの歴史叙述が、征服によってスペインからもたらされた枠組に基づいた歴史観で貫かれていることを指摘してきた(井上 2000; 井上 2001; Inoue Okubo 2009)。

このように、アルバに対する評価として、「先住民記録者」のイメージが広く流布された一方で、その枠に押し込めることに疑問を呈する少数の研究者が存在するという状況が続いてきた。

II. アルバ・イシュトリルシヨチトルの記録文書

1. シグエンサ・イ・ゴンゴラとの思想的関連

シグエンサは、フアナ・イネス・デ・ラ・クルス(Juana Inés de la Cruz, ソル・フアナ)と並んで、17世紀ヌエバ・エスパニーヤを代表する知識人である。二人はしばしば「クリオーリョ・アイデンティティの萌芽」と評され、18世紀から独立期にかけて高まりを見せることになるクリオーリョ主義の先駆者と位置づけられてきた。

実際、シグエンサは「アメリカ人(americano)」を自称し、生まれ故郷であるメキシコを「祖国」と表現している。シグエンサの著作には、ペニンスラールと自己を差異化するために、アメリカもしくはメキシコ固有のものとして提示される要素がいくつか認められる。グアダルーペの聖母はその一つであり、これと並んで重要だったのが聖トマスによる原始布教説である。この原始布教説は、スペイン人が到来するよりもはるか以前、イエス・キリストの使徒によってアメリカ大

陸にキリスト教が伝えられたという主張である。シグエンサはこの説を支持し、先スペイン期の神もしくは伝説的人物であるケツアルコアトルを聖トマスと同一視して、ケツアルコアトルに関わる証拠を聖トマスによるアメリカ大陸でのキリスト教布教の証拠と見なした。

キリストの使徒によるキリスト教布教説はシグエンサ独自のものではなく、既に別の著述家たちが16世紀からその可能性や真偽を論じていた³⁾。重要なのは、ケツアルコアトルと関連づけてこの説を論じ、ケツアルコアトルに関する古代の情報をその証拠として提示するという着想をどうやって得たかである。

シグエンサは、約半世紀前のアルバの著作の原稿を所有していた。これらアルバの作品を丹念に読めば、彼とシグエンサの間に細かな点での一致や相似が確認される。別の機会に論じたため詳細には踏み入らないが、原稿を通してしか接触のなかったアルバとシグエンサの二人は、ケツアルコアトルによる古代の布教説という、言説面で確かにつながりがあると見なすことができる（井上 2005: 92-96; Inoue Okubo 2007: 79-85）。

2. 先住民史家としての立場

では、時代を遡ってアルバの歴史叙述がクリオーリヨ的と呼べるかどうかと言うと、にわかにはそのように認め難い。というのも、アルバは、あくまで「ナワトル語を解する先住民著述家」であり、「テスココ王家の直系の末裔」という書き手としての立場を強調しながら歴史叙述を展開しているからである。

『ヌエバ・エスパーニャ史要約 (*Sumaria relación de la Historia general desta Nueva España...*)』の冒頭で、アルバは歴史書執筆の動機を次のように表明している。

若い頃から、常々、私はこの新世界で起こった幾多の出来事について知りたいと望んでおりました。それらの出来事は、ローマ、ギリシア、メディア、その他世界に名高い異教徒の国々で起こった出来事に匹敵するものです。しかしながら、時が流れ、私の先祖たちの支配や国々が潰えた結果、その歴史は忘れられたままになっています。それゆえ、私はこの〔新世界で起こった事柄を知るという〕望みを叶えるべく東奔西走し、苦心の末、歴史や年代記の記された絵文書、あるいは詩歌を集めて、それらを参照いたしました。(Alva Ixtlilxóchitl 1985: I, 525)⁴⁾

また、彼はスペイン人記録者の記述について以下のように述べている。

〔…〕様々な著述家たちが当地ヌエバ・エスパーニャの歴史を扱ってきたものの、その見解は著者によって食い違っています。このことに鑑みて、私はいずれの著述家にも従うつもりはありません。(Alva Ixtlilxóchitl 1985: I, 517)

他の作品においてもアルバはスペイン人記録者が情報の信憑性を正しく判断できず、偏った内容の記述をしていることを時に強い口調で批判する。『トルテカ人とチチメカ人に関する歴史報告書 (*Sumaria relación de todas las cosas...*)』では、「私は当地の事柄について書かれたスペイン人の歴史書を多く読んできた」と述べた上で、次のような批判を展開する。

昔の出来事の報告なので驚きはしないが、諺にあるように、ある者たちは^{セスタ}箆、別の者たちは^{バジエスタ}石弓
 と言う。他の事柄についても、ある者たちの言うことと他の者たちの言うことは別々である。激
 情をもって語るものもいれば、愛情を持って語るものもいる。実際に起こった出来事に基づきつ
 つも作り話を述べる者もいる。また、言語や古老の言っていることがよくわかっていない者もいる。
 実際、^{ファブラス}彼らの間で生まれ育った私でさえ、これら現地の人々とのやり取りではこうした事態が何
 度も起こったのだから。(Alva Ixtlilxóchitl 1985: I, 287) ⁵⁾

このように、スペイン人記録者批判の背後にはアルバがナワトル語の情報を見極め、信憑性の
 ある情報のみを利用できるという自負があった。つまるところ、先住民であり、なおかつ情報を
 正確に見極められる作者という立場でアルバは歴史叙述を進めた。情報の正確な把握と解釈は、
 テスココ王家の直系先住民という自負に基づいており、著者としてイシュトリルシヨチトル姓を
 名乗ったのもこれに関連すると思われる⁶⁾。

確かに、アルバの著作では、ヨーロッパからもたらされた諸概念が先スペイン期の事象を説明
 する際に多く用いられ、叙述全体の枠組もキリスト教摂理史観に沿ったものである(井上 2001;
 Inoue Okubo 2009: 232-238)。この部分をクリオーリヨ的と呼ぶこともできなくはないが、上で
 見たように、アルバ自身があくまで「先住民著述家」と自己を見なして歴史を書き綴っているこ
 とは無視できない。

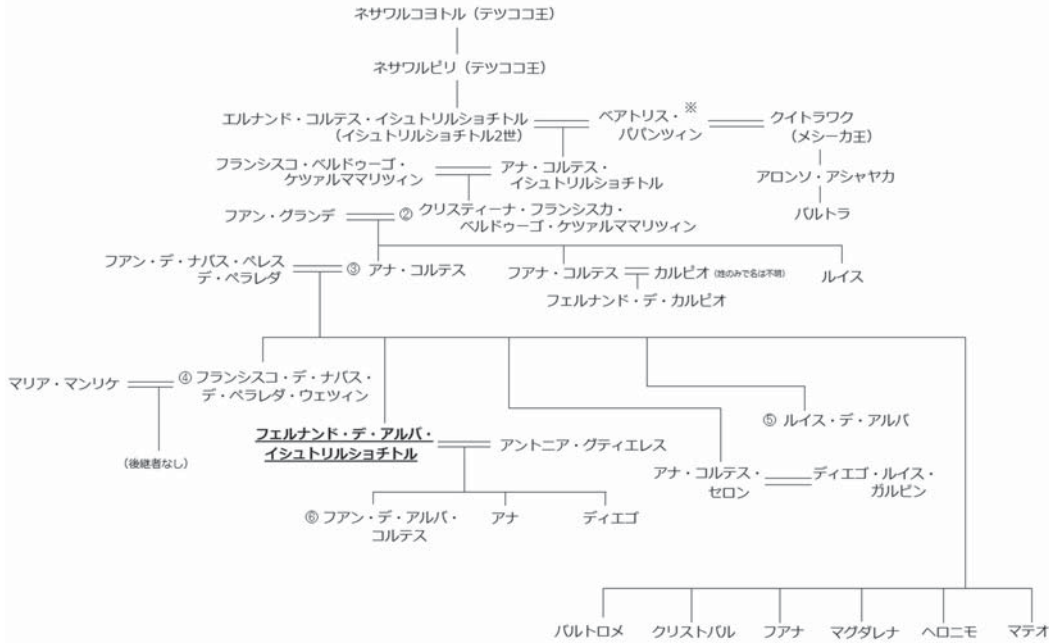
このように著作で自身が提示している「先住民記録者」としてのアルバ像に対して、彼の家系
 や生活環境に関する史料から見えてくるアルバ像はかなり異なったものである。以下では、そ
 うした史料を用いながら、記録者としてではなく、一個人としての彼について見ていきたい。

III. アルバ・イシュトリルシヨチトルの生涯と家系

1. 家系と出自

フェルナンド・デ・アルバ・イシュトリルシヨチトル(ここからは家族間の混同を避けるため
 フェルナンドと略記)は、1578年に生まれた。父はカスティーリャ地方、カスティーリョ・ロク
 ビーニ(またはロクビーネ)村出身のファン・ペレス・デ・ペラレダ、母はサン・ファン・テオティ
 ワカンのカシーケ家系の血を引く混血女性アナ・コルテスであった(図1; Alva Ixtlilxóchitl 1985:
 II, 338)。

フェルナンドは10人兄弟のうちの次男であった⁷⁾。テスココ王家の血を引くことから「テス
 ココの記録者」と呼ばれ、この理由から短絡的にテスココ生まれとされてきたが、実はその可能
 性はほとんどない。テスココ王家の血を引くのは事実であるが、直接的にはサン・ファン・テオ
 ティワカンのカシカスゴ(カシーケ領)の家系に生まれた人物である。このカシカスゴは、1533
 年に王立アウディエンシアによって認められたもので、カシーケのフランシスコ・ベルドゥーゴ・
 ケツァルマリツィンは、征服前にこの町のトラトアニだった人物である(Munch 1976: 10, 17)。
 征服直前のテオティワカンはテスココ(アコルワカン)に従属しており、征服時のトラトアニの
 家系が征服後も存続したため、テスココとの結びつきが深いのは事実である。実際、ケツァルマ
 リツィンの配偶者はテスココ王家の血を引くアナ・コルテス・イシュトリルシヨチトルであっ
 た。



数字①～⑥はカシカスゴ（カシーケ領）の継承者の順を示す。
 ベアトリス・ババンツィン（※）は、クイトラワクの元妻もしくは娘の可能性があると特定できず。

図 1：アルバ・イシュトリルシヨチトルの家系

出典：Alva Ixtlilxóchitl 1985; Fernández de Recas 1961; AGN, “Relación de los primeros señores...”; AGN, “Tratado del principado...”をもとに筆者作成

以上のような事情から、現在では、フェルナンドの出生地はサン・ファン・テオティワカンと考えられている。しかしながら、もう一つ、別の可能性があることも無視できない。それはメキシコ市である。彼の祖母に当たり、上述のケツアルママリツィンの娘である先住民女性クリスティーナ・フランシスカ・ベルドゥーゴは1596年7月19日付けで遺言を残している。この遺言書によれば、彼女は「サン・ファン・ティウティワカン[テオティワカン]のカシーカ・プリンシパルで、当メキシコ市に在住」と記されており、なおかつ同市内のサンティアゴ・トラテロルコ修道院に埋葬されることを希望している。その際、「私の遺体にはサンタ・カタリーナ教区教会の司祭に同行してもらう」旨も指示している（Alva Ixtlilxóchitl 1985: II, 287）。このサンタ・カタリーナ教会とは、1650年10月26日にフェルナンド自身が埋葬された場所でもある⁸⁾。



図 2：現在のサンタ・カタリーナ教会
 出典：筆者撮影（2010年3月）

また、クリスティーナ・フランシスカの娘でカシーカの地位を継承したアナ・コルテス（フェルナンドの母）も 1639 年 2 月 5 日付で遺言を残している。その中で彼女は「現在居住している当市〔メキシコ市〕、サンタ・アナ地区に数軒の家を有している」と述べている（Alva Ixtlilxóchitl 1985: II, 347）。これらの記述を考慮すれば、フェルナンドが生まれた 1578 年の時点で既に家族の主たる住居はメキシコ市にあった可能性も十分に考えられる。それゆえ、フェルナンドの生地がメキシコ市という可能性も現時点では考えておく必要がある。

上述のサンタ・カタリーナ教会を中心とするサンタ・カタリーナ地区は、1568 年に小さな教区として始まり、メキシコ市内の非インディオ住民（スペイン人、黒人、その他混血者）を対象としたもので、「スペイン人居住区」に位置づけられるものであった（Pescador 1992: 20-21）。フェルナンドの母が家を保有していたサンタ・アナ地区は、サンタ・カタリーナ地区のさらに北に位置し、もともとはトラテロルコのフランシスコ会士の礼拝堂がある場所だった。17 世紀前半はまだまだ市の外れであったが、部分的にスペイン人が居住していたと考えられる。

スペインのアメリカ植民地、とりわけ副王都メキシコ市のような都市部では、スペイン人居住区とインディオ居住区の区別が厳格に行われ、カスタ社会が徹底されていたかのように理解されてきた。しかし、当初からそれほど厳格な区別が実態として機能していたかどうかには疑問が残る。例えば、エルナン・コルテスの息子マルティン・コルテスのように、混血でありながらもスペイン人としてスペイン人社会で生活した人物がいたことも知られている。D・コープという

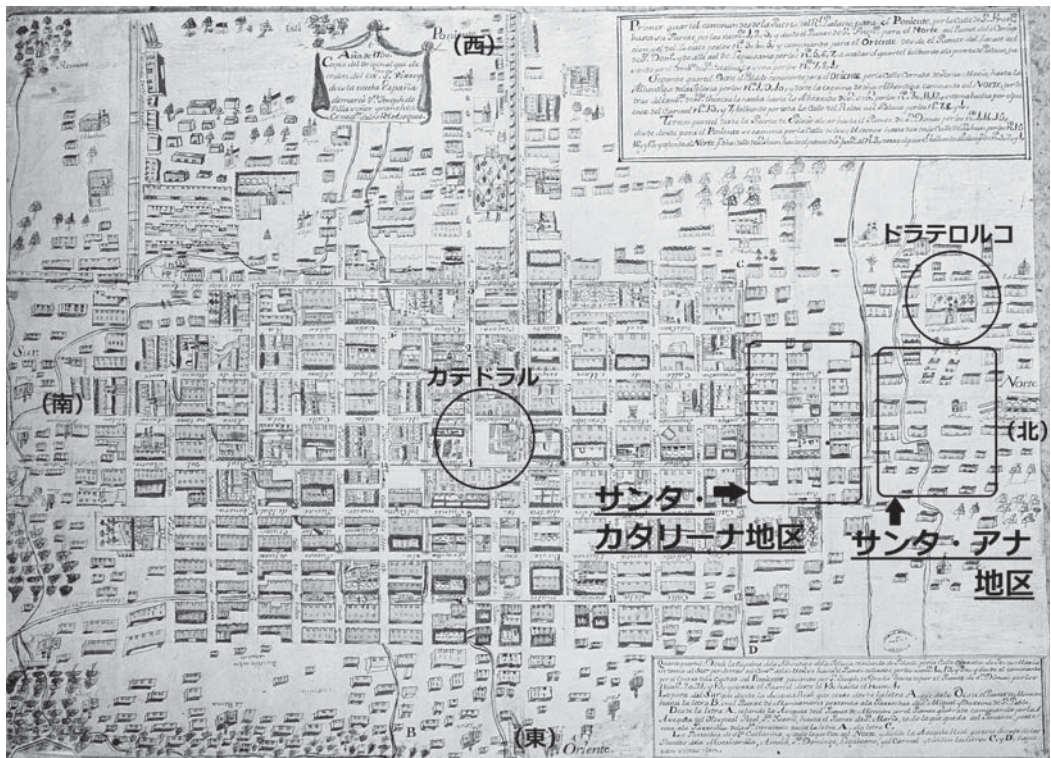


図 3：18 世紀半ばのメキシコ市の地図におけるサンタ・カタリーナおよびサンタ・アナ地区
 出典：AGI, “Plano de la Ciudad de Mexico...”

研究者が述べているところでは、カスタ社会がある程度確固たる形を整えるのは17世紀も半ばになってからのことであった（Cope 1994: 24）。裏を返せば、「裕福でないスペイン人」や「経済的に成功したメスティソ」、あるいは「スペイン人との縁戚関係を築いた先住民貴族」といった、血統の面で見れば多様な集団が混然とそこに存在していたと考えることができる。つまり、スペイン人居住区に明白に一般の先住民という立場の者が用もなく自由に出入りできることはなかったであろうが、先住民貴族の子孫や混血者がスペイン人の家族としてそこに暮らすような曖昧なケースは十分にあり得たと想像される。

同様に、上記の「スペイン人居住区」への出入りについて言えば、外見だけの判断で区別して市内への入場制限をしたというわけではないだろう。実際、外見だけで混血者か否かを完全に見分けることは不可能に近い。言い換えれば、本人たちが社会の中でどのように位置づけられているかが一つの判断基準になっていたものと思われる。

アナ・コルテスおよびその家族は、1643年⁹⁾、サン・ファン・テオティワカンの土地権利をめぐる文書の中で、「スペイン人」と見なされている（Alva Ixtlilxóchitl 1985: II, 354, 359ss）。つまり、実際には先住民の血を引くメスティソやカスティソであっても、外部から見たときには「スペイン人」と認識されうるような社会的立場の生活をしていたと考えられる。

2. 人生・生活環境

このカシーケ家系に関わる文書では、フェルナンドの名はしばしば「フェルナンド・デ・アルバ（またはダルバ）」と表記され、本人もそのように署名している（Alva Ixtlilxóchitl 1985: II, 281, 332-333, 356）。すなわち、実生活の場面では、フェルナンドはイシュトリルショチトルという先住民姓を日常的に使用していなかったと考えられる。

イシュトリルショチトルという姓は、コルテス到来時のテスココ王子の一人、イシュトリルショチトル¹⁰⁾の名に由来する。フェルナンドの曾祖母（イシュトリルショチトル2世の娘であるアナ）はイシュトリルショチトル姓を名乗っていた形跡があるが、世代が進むにつれて史料に先住民姓が記載されている例は少なくなる。歴史書の著者名として、私たちはイシュトリルショチトルという名称でしばしば彼のことを呼んでいるが、実際に生きていた生身の人物としては、この姓はそれほど馴染みのあるものではなかったと思われる。

1620年5月8日付でフェルナンドの父ファン・デ・ベラレダは遺言書を残している。その中の不動産相続者を指名する箇所では、息子もしくは孫の誰かが聖職者となることを望み、息子であるフェルナンドおよびバルトロメの名に具体的に言及している（Alva Ixtlilxóchitl 1985: II, 341）。フェルナンド自身は聖職者になることはなかったが、弟のバルトロメはこの父の希望を実現させ、後にチアパ・デ・モタの在俗司祭となった¹¹⁾。またこの遺言書が作成された時点でフェルナンドは「サン・ファン・テオティワカンに在住もしくは常駐」とされており、さらには「サンティアゴ〔サンティアゴ・トラテロルコと思われる〕に何軒かの家」を父から譲り受けている（Alva Ixtlilxóchitl 1985: II, 341; Munch 1976: 48）。

フェルナンドに関して、史料が残されており、ある程度その経緯を追うことのできる事件がいくつかある。セルナ大司教にまつわる以下の出来事はその一つである。

副王ヘルベス侯爵と対立したメキシコ大司教ペレス・デ・ラ・セルナは身の危険を回避するため、メキシコ市を密かに脱出し、1624年1月13日夜、サン・ファン・テオティワカンに避難し

た。翌日、同大司教はテオティワカンで副王の破門を宣言する。この逃避にアルバ家が協力をした。また、ちょうどこの事件の頃、フェルナンドは『ヌエバ・エスパーニャ史要約』という作品を執筆し、その冒頭には高位の人物への献辞を添えた (Alva Ixtlilxóchitl 1985: I, 525)。これらの事実関係から推察されるのは、①アルバ家がメキシコ市で起こった副王と大司教の対立という構図に無縁ではなく、おそらくは積極的に関与して大司教の避難に手を貸していたこと、さらには、②この大司教に当時執筆中であった『ヌエバ・エスパーニャの歴史』の要約版を託して、出版を目論もうとしたと考えられること、の二点である。

フェルナンドはいくつかの職を得ていることが史料から分かっている。最初に史料から確認されるのは、テスココのフェス・ゴベルナドール職で、1612年12月に副王グアダルカサル侯爵から任命を受けている (Manuscritos de Texcoco 1979: 14-15; Alva Ixtlilxóchitl 1985: II, 334-335)。その後、1616年12月にはチャルコ地方にあるトラルマナルコの町のフェス・ゴベルナドールに任命され、ちょうど1年後にはさらに任期を1年延長するとの通達が同副王から出されている (Manuscritos de Texcoco 1979: 15-16; Alva Ixtlilxóchitl 1975: II, 336-337)。また、1621年12月の段階では、「チャルコ地方のフェス・ゴベルナドール」であったとの記録も残されている (Manuscritos de Texcoco 1979: 16-17; Alva Ixtlilxóchitl 1985: II, 344-345)。

その後の足取りについては詳しくわからないものの、上述のサン・ファン・テオティワカン土地権利をめぐる1643年の裁判文書の中に、「メキシコ市在住」との証言が複数回認められる (Alva Ixtlilxóchitl 1985: II, 357, 359ss.)。さらに、この1643年時点で、フェルナンドはフスガド・ヘネラル・デ・インディオスで何らかの職 (おそらくは父ファン・デ・ペラレダと同様の通訳官の職) に従事していたとの記載もある (Alva Ixtlilxóchitl 1985: II, 359, 360ss.)。

フェルナンドの死については、1650年であったということがサンタ・カタリーナ教会の埋葬記録からわかっている。ただし、遺言は残さなかったため、詳しいことは明らかではない (Alva Ixtlilxóchitl 1985: II, 370)。

3. フェルナンドの家族

フェルナンドには、ファン、アナ、ディエゴという3人の子がいた。フェルナンドがいつ結婚したのかは定かではないが、アントニア・グティエレスという人物が妻であったとされる。

オゴルマンによれば、長男ファン・デ・アルバが生まれたのは1624年頃と推定されるが、この時点では正式な婚姻外の子であったようである (Alva Ixtlilxóchitl 1985: I, 29, 38; II, 390)。妻アントニアに関しては、史料の記述に矛盾があり、正確なことはわかっていない。未公刊のある史料 (1678年のアントニアの遺言書) では、アントニアはファン・デ・ペラルタ [ペラレダ] (フェルナンドの父の名と同一) の未亡人として登場する。アントニアが先住民だったのか白人だったのかも不明だが、この史料によれば、父アロンソ・グティエレス、母テレサ・ドゥエニャスの間にメキシコ市で生まれた嫡子で、史料が残された17世紀末の時点で、同市のサンタ・アナ地区の住民であった (“Testamento de Doña Antonia Gutiérrez”, fs. 131r, 139r)。彼女については、別の史料として、1680年にサンタ・カタリーナ教会での埋葬記録もあり、こちらの文書には「フェルナンド・デ・アルバの妻だった」、「遺言を残さなかった」との記載がある (Alva Ixtlilxóchitl 1985: I, 40)。

いずれにせよ、長男ファンは1666年に叔父 (フェルナンドの弟) のルイス・デ・アルバとの

争いの末、サン・ファン・テオティワカンのカシカスゴを継承した。アナ・コルテス（フェルナンドの母、ファンの祖母）の死後、まずカシカスゴを受け継いだのは長男フランシスコ・デ・ナバスであった。フランシスコはスペイン人女性と結婚したが、継承者を残さず、1645年に死去した。カシカスゴ（先住民カシーケ領）という性質上、フランシスコの妻マリーア・マンリケはスペイン人であることから継承者にはなれなかった¹²⁾。そのため、次男フェルナンドの息子であるファンと、三男ルイスの間でその権利が争われ、最終的には1666年にファンの継承が認められたというものである。

ファンは、シグエンサと交友があった¹³⁾。シグエンサは、『西方の楽園』の中でファンおよびこの家系に言及している箇所があり、ファンを「非常に正しい振る舞いをし、諸聖人の信仰に篤い人物」と形容している（Sigüenza y Góngora 1995: 224）。

ファンとシグエンサの関係について具体的な事実関係としてわかっているのは、ファンがサン・ファン・テオティワカンの地で、シグエンサに礼拝堂つき司祭になるよう依頼し、これを承諾したシグエンサにアシエンダを与えたということである（Munch, 1976: 30）。また、シグエンサにカシカスゴそのものの管理を任せ、「スペイン人」であるシグエンサが実質的には先住民カシーケ領を取り仕切る事態となった時期もあった（Munch 1976: 28）。さらに、ファンは生前、父フェルナンドの蔵書をシグエンサに譲っている。実際、手稿のまま未出版となったフェルナンドの歴史的著作を現代の私たちが読むことができるのは、シグエンサを経由して後世に伝えられた結果である¹⁴⁾。さらに、その後、ファンは1680～82年頃に死去し、シグエンサは遺言執行人となったことがわかっている（Alva Ixtlilxóchitl 1985: I, 40-41）。

このように、17世紀後半にフェルナンドの息子ファンが、「クリオーリョ」の核心とされるシグエンサと交流していたこともまた、このアルバ家がクリオーリョに近い環境にあったことを象徴するものと言えよう。

おわりに

ここまでフェルナンド・デ・アルバ・イシュトリルシヨチトルという人物を、従来の歴史書とは別の、家系に関わる史料から見た。彼の生涯や家系に関する情報から見て取られるのは、この人物が植民地時代の一般的な「インディオ」とはかなりかけ離れた生活を送っていたことである。16世紀の段階からメキシコ市内に不動産を所有し、サンティアゴ・トラテロルコやサンタ・カタリーナといった先住民向けではない教会とつながりを持っていた。フェルナンドの息子の世代にはシグエンサとの直接的な交流もあり、きわめてクリオーリョ層に近い生活を営んでいたと言えるだろう。

これまでの研究では、歴史書の記述内容の分析を通して、先住民貴族層もしくはその末裔として記録文書を残したアルバ像が論じられてきた。ヨーロッパの規範に従いながら征服以前の世界を再評価し、その重要性を読者に認識させるという手法に関しては、シグエンサと類似した特徴が認められ、この点において彼の論法は「クリオーリョ的」であるとも言える。しかしながら、本人はあくまで「インディオ著述家」という立場を取り、後にアルバの著作を引用したクリオーリョ著述家が彼を「先住民史家」と見なしたことで¹⁵⁾、彼には先住民というイメージが付きまとうことになった。本稿での考察からは、そうしたイメージに反し、アルバおよび彼の家系の実生

活は、はるかにスペイン人に近い環境に置かれたものであったことが見て取られる。

今回のアルバのように、「先住民記録文書 (crónicas indígenas)」と漠然と呼ばれてきた各文書やその作者(クロニスタ)の分類方法というのは非常に曖昧な基準に拠ってきた。時としてその分類基準に「血筋」(両親ともに先住民か、あるいはメスティソの出自を持つのか)が重視されることもあった。しかし、別稿で論じたように、先住民記録者、スペイン人記録者、メスティソ記録者などといったカテゴリーに明確な境界線を引くことは容易ではない(Inoue Okubo 2007: 66-67)。

この観点は、各個人の生涯や実生活を見ていく場合にも同様であろう。植民地時代メキシコ市のカスタ社会の詳細な事例を紹介した上述のコーブの研究からもそのことが見て取られる。確かに、出自と社会的立場には相互関係が認められると彼は述べているが、それは、その境界線というのが決して明確なものではなかったことの裏返しでもある。

最後に、以上の考察を踏まえて、「クリオーリヨの萌芽」なるものをあらためて考え直してみたい。

クリオーリヨ・アイデンティティの目覚めについても明確な境界線があったというのは難しいであろう。無論、いくつかの分岐点となった出来事や人物が存在し、シグエンサがその一人であったことは確かと思われる。しかし、シグエンサのような人物を核として確固たるアイデンティティを共有する一定の集団としてのクリオーリヨという姿は17世紀を通して見えてこない。

やがて集団としてのクリオーリヨのアイデンティティが形成されていく上で利用されることになる個別の議論やアイデアは17世紀ヌエバ・エスパーニャ知識人の世界に散りばめられていた。つまり、この時点では、後々クリオーリヨの思想が確立されていく中で鍵となる言説が生まれてはいたが、それを主張するまとまった集団というものには存在していなかった。シグエンサは個人の言説レベルでそれを比較的明確に表現した一人に過ぎなかったと考えられる。

他方、本稿で考察したように、「先住民記録者」でありながら後のクリオーリヨの言説と共通する論法を用い、シグエンサの1世代前に相当するアルバのような人物も存在した。しかもこのアルバに関しては、本稿で見たようにきわめてクリオーリヨに近い生活環境を生きた人物であった。換言すれば、アルバは移行期の、研究者の観点によってクリオーリヨ側に含まれるか否かが曖昧な境界線上にいた一人だったと言えよう。クリオーリヨ意識の目覚めを一層明らかにしていくには、集団としてのクリオーリヨのアイデンティティ形成を考えると同時に、その際に利用された着想がどこから出てきたのかについても考えていく必要がある。

筆者の今後の課題としては、こうしたクリオーリヨ意識の形成の基盤となった言説をさらに追いつ、「境界線上」もしくは「過渡期」の異なる事例を詳しく見ていくことである。そのためには、通説的理解に捉われて「クリオーリヨ」という人種の分類に該当する人物だけを追うのでは不十分である。16世紀後半から17世紀前半にかけては、興味深い著述家の作品が多く存在する。ディエゴ・バラデス(Diego Valadés)¹⁶⁾やアグスティン・デ・ベタンクル(Agustín de Betancourt)¹⁷⁾などはその例であるが、上述のような観点からの彼らや彼らの作品に関する分析は米国やメキシコの学界でもあまりなされていない。クリオーリヨ意識の「萌芽」の実態をより詳しく解明していくには、シグエンサと同時期および彼に先行する比較的情報のある人物の研究をさらに掘り下げていく必要がある。当面はこうした著述家の作品を読み込んでいくことで、「クリオーリヨ」の源流を洗い直すとともに、「先住民」側との関わりも解明できるよう、具体的事例の研究を重ね

ていきたい。

本稿は、平成 21 年度専修大学研究助成個別研究「17 世紀メキシコにおけるクリオーリョ知識人」、ならびに平成 21～25 年度文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」（代表・青山和夫）研究項目 A02「メソアメリカ文明の盛衰と環境の通時的的研究」（代表・青山和夫、課題番号 21101003）の助成を受けた研究成果の一部である。

注

- 1) 他に主なものとしては、Alberro 1992; Brading 1988; Lafaye 1985 が挙げられる。
- 2) 引用文は拙訳で、〔 〕内は訳者による補足、省略箇所を示す。後述するように、現在ではアルバの生年は 1578 年と考えられ、没年も 1650 年であったことが判明している。また、サンタ・クルス学院で学んだ可能性もほとんどないことがわかっている。
- 3) 16 世紀にはディエゴ・ドゥランやファン・デ・トバルといった記録者がこうした可能性に言及している (Lafaye 1985: 251, 256)。また、この説を唱えたアントニオ・デ・ラ・カランチャの『ペルーにおける聖アウグスティヌス会の教化についてのクロニカ』やグレゴリオ・ガルシアの『新世界ならびに西方インディアスの起源』をシグエンサが読んでいたこともわかっている (井上 2005: 96)。
- 4) 以下、アルバの引用は拙訳で、〔 〕は本稿の筆者による補足もしくは省略箇所を示す。『ヌエバ・エスパーニャ史要約』は、一般に『チチメカ人の歴史 (*Historia de la nación chichimeca*)』の名称でも知られる『ヌエバ・エスパーニャの歴史 (*Historia general de la Nueva España*)』という著作の要約版である。
- 5) 傍点は本稿の筆者による。
- 6) 後述するように、実生活では「フェルナンド・デ・アルバ」を名乗ることが多く、イシュトリルシヨチトル姓は常時使っていたわけではないと考えられる。
- 7) 1620 年 5 月 8 日付の父ファン・ペレス・デ・ペラレダの遺言書によれば、嫡子は「ドン・フランシスコ・デ・ナバス・ケツアルママリストリ、ドン・エルナンド〔フェルナンド〕・デ・アルバ・イシュトリルシヨチトル、ドニャ・アナ・デ・アルバ、クリストバル・サンチェス・デ・ペラレダ、ドニャ・フアナ・デ・ナバス、ドン・ルイス・グランデ・デ・アルバ、幼少のドニャ・マグダレナ・デ・アルバ、ドン・ヘロニモ・デ・ナバス、ドン・バルトロメ・デ・アルバ」の 9 人である (Alva Ixtlilxóchitl 1985: II, 340)。他方、1639 年の母アナ・コルテスの遺言書では「ドン・フランシスコ・ナバス・イ・ペラレダ、ドン・フェルナンド・デ・アルバ、ドニャ・アナ・デ・アルバ、ドン・クリストバル・デ・アルバ、ドニャ・フアナ・デ・ナバス、ドン・ルイス・デ・アルバ、ドニャ・マグダレナ・デ・アルバ、スンバンゴ区の聖職禄受領司祭であるドン・バルトロメ・デ・アルバ得業士、既に死去しているドン・ヘロニモならびにマテオ・デ・ペラレダ」の計 10 人である (Alva Ixtlilxóchitl 1985: II, 347)。
- 8) なお、同教会の埋葬記録によれば、フェルナンドは遺言を残さなかった (Alva Ixtlilxóchitl, 1985; II, 370)。
- 9) 先に引用した遺言書は 1639 年の日付だが、1643 年時点でアナ・コルテスはまだ存命中だった。
- 10) 先スペイン期のテスココ王イシュトリルシヨチトル (ネサワルコヨトルの父) と区別するために、イシュトリルシヨチトル 2 世と呼ばれることもある。洗礼後はエルナンド・イシュトリルシヨチ

- トルという名で、メシコ征服戦争時の対テノチティランの戦いでコルテス陣営に協力した。
- 11) バルトロメはメキシコ大学で得業士となった後、メキシコ大司教区の司祭となった。ナワトル語の告解手引書の著者としても知られ、イエズス会の宣教師ともつながりがあった。
 - 12) フランシスコが死去したのは1645年だが、直後に継承を名乗り出たのはフェルナンドではなかった。フェルナンドに継承する気がなかったのか、死の数年前なので体調が既に悪かったなどの理由があったのかどうかはよくわからない。
 - 13) フェルナンドとシグエンサの直接の交流はなかったと思われる。仮にあったとしても、フェルナンドは1650年に亡くなっており、1645年生まれの子グエンサはその時点でまだ5歳の少年だったことになる。
 - 14) アルバ家から受け継いだ史料を含むシグエンサの蔵書の行方については、Trabulse 1988を参照。
 - 15) シグエンサもその一人で、フェルナンドのことを「メシコ語（ナワトル語）のキケロ」と呼んだ（Sigüenza y Góngora 1995: 52）。
 - 16) スペイン人とトラスカラ女性との間に生まれたとされるメスティソで、『キリスト教修辞学（*Retórica cristiana*）』を著した。
 - 17) メキシコ市生まれと思われ、シグエンサとも交流があったフランシスコ会士。『聖フランシスコ修道会サント・エバンヘリオ管区に関する記録（*Crónica de la provincia del Santo Evangelio del Orden de San Francisco*）』を書き残した。

文書館史料

Archivo General de Indias, España (AGI):

“Plano de la Ciudad de Mexico remitido por la Sala del Crimen de Mexico con expediente sobre la division de la Ciudad en cuarteles para las rondas”, MP-MEXICO, 178, 1750.

Archivo General de la Nación, México (AGN):

“Testamento de Doña Antonia Gutiérrez”, Ramo de Tierras, vol. 167 – 2ª parte, exp. 2, fs.130 – 188.

“Relación de los primeros señores de San Juan Teotihuacan”, Ramo de Historia, tomo 1, núm. 5, fs. 136v – 138r.

“Tratado del principado y nobleza del pueblo de San Juan Teotihuacan, 1621”, Ramo de Historia, tomo 1, núm. 6, fs. 138v – 151v.

参考文献

井上幸孝

- 2000 「ヌエバ・エスパーニャにおける唯一神信仰説の利用に関する一考察—アコルワカンの先住民系クロナカを中心に—」, 『ラテンアメリカ・カリブ研究』第7号, 13～24頁。
- 2001 「アルバ・イシュトリルショチトルの記録文書に見る先スペイン期の歴史」, 『神戸外大論叢』第52巻4号, 91～109頁。
- 2005 「カルロス・デ・シグエンサ・イ・ゴンゴラの歴史観—植民地時代前半メキシコの歴史記述との比較—」, 『神戸市外国語大学研究科論集』第8号, 71～100頁。

平田和重

- 2007 「先住民の精神的征服—告解の手引書にみる植民地社会の教会と布教—」, 坂井正人・鈴木紀・松本栄次編『ラテンアメリカ』, 朝倉世界地理講座・大地と人間の物語・14巻, 朝倉書店, 178～189頁。

横山和加子

- 1995 「植民地期における異人種間の交渉と軋轢—メキシコ市の事例の一考察—」, 『ラテンアメリカ・カリブ研究』第2号, 10～16頁。

レオン=ポルティエヤ, ミゲル

- 1994 『インディオの挽歌—アステカから見たメキシコ征服史』, 山崎眞次訳, 成文堂 (原著初版1959年)。

Alberro, Solange

- 1992 *Del gachupín al criollo. O de cómo los españoles de México dejaron de serlo*, El Colegio de México, México.

Alva Ixtlilxóchitl, Fernando de

- 1952 *Obras históricas de Don Fernando de Alva Ixtlilxochitl*, ed. de Alfredo Chavero, ed. facsimilar de la de 1891–92, Editora Nacional, México, 2 tomos.
- 1972 *Nezahualcóyotl Acolmiztli 1402–1472*, prolog. y selec. de Edmundo O’Gorman, Gobierno del Estado de México, México.
- 1985 *Obras históricas*, ed. de Edmundo O’Gorman, UNAM, México, 2 tomos, reimp.

Baudot, Georges

- 1995 “Nezahualcóyotl, príncipe providencial en los escritos de Fernando de Alva Ixtlilxóchitl”, *Estudios de Cultura Náhuatl*, vol. 25, pp. 17–28.

Brading, David

- 1988 *Los orígenes del nacionalismo mexicano*, Era, México, 2ª ed.
- 1991 *The First America: The Spanish Monarchy, Creole Patriots and the Liberal State, 1492–1867*, Cambridge University Press, Cambridge.

Cope, Douglas

- 1994 *The Limits of Racial Domination: Plebeian Society in Colonial Mexico City, 1660–1720*, The University of Wisconsin Press, Madison.

Cortés Delgado, José Luis y Jorge González Aragón

- 2003 *Corpus urbanístico de la ciudad de México en el Archivo General de Indias*, UAM / Embajada de España en México, México.

Fernández de Recas, Guillermo S.

- 1961 *Cacicazgos y nobiliario indígena de la Nueva España*, UNAM, México.

Gibson, Charles

- 1964 *The Aztecs Under Spanish Rule: A History of the Indians of the Valley of Mexico 1519–1810*, Stanford University Press, Stanford.

Inoue Okubo, Yukitaka

- 2007 “*Crónicas indígenas: una reconsideración sobre la historiografía novohispana temprana*”, en Danna Levin y Federico Navarrete (coords.), *Indios, mestizos y españoles: Interculturalidad e historiografía en la Nueva España*, UAM-Azcapotzalco / UNAM, México, pp. 55 – 112.
- 2009 “La visión contemporánea sobre Ixtlilxóchitl y la visión de Ixtlilxóchitl sobre la historia”, en Rosa Camelo y Miguel Pastrana Flores (eds.), *La experiencia historiográfica*, UNAM, México, pp. 229 – 239.

Lafaye, Jacques

- 1985 *Quetzalcóatl y Guadalupe. La formación de la conciencia nacional en México*, FCE, México, 2ª ed.

Manuscritos de Texcoco

- 1979 *Manuscritos de Texcoco. Documentos de Texcoco/Lamentaciones de Nezahualcóyotl/Xochicalco (documentos publicados en 1903 por el doctor Antonio Peñafiel)*, Innovación, México.

Martínez-San Miguel, Yolanda

- 2009 “Colonial Writings as Minority Discourse?”, in Ralph Bauer and José Antonio Mazzotti (eds.), *Creole Subjects in the Colonial Americas: Empires, Texts, Identities*, The University of North Carolina Press, pp. 162 – 190.

Mier y Terán Rocha, Lucía

- 2005 *La primera traza de la ciudad de México 1524 – 1535*, UAM / FCE, México, 2 tomos.

Munch, Guido

- 1976 *El cacicazgo de San Juan Teotihuacan durante la Colonia 1521 – 1821*, INAH, México.

Pescador, Juan Javier

- 1992 *De bautizados a fieles difuntos. Familia y mentalidades en una parroquia urbana: Santa Catarina de México, 1568 – 1820*, El Colegio de México, México.

Romero Galván, José Rubén

- 2003 “Fernando de Alva Ixtlilxóchitl”, en José Rubén Romero Galván (coord.), *Historiografía mexicana I: Historiografía novohispana de tradición indígena*, UNAM, México, pp. 351 – 366.

Sigüenza y Góngora, Carlos de

- 1995 *Paraíso occidental*, ed. de Margarita Peña, CNCA, México.

Trabulse, Elías

- 1988 *Los manuscritos perdidos de Sigüenza y Góngora*, El Colegio de México, México.

